

8 月 8 日、9 日、私は自分の進路と将来を見つめ直す機会が欲しいと東京を訪れました。まず、東京駅に着いてからは国会議事堂、文部科学省などが近辺にある霞ヶ関ビルで DF 夏季プログラムに参加しました。基調講演として筋電義手を造っている近藤さんの話を聞きました。近藤さんの講演の中で印象に残ったのは「モノは世界共通言語」という言葉でした。たとえ国籍が違い言葉が通じなかったとしても、義手であれば装着したり、触れたりすることでお互いがコミュニケーションをとることができるということです。また、私は近藤さんが言っていたように最初、義手は実際の手にデザインが似るよう近づけて造るというイメージがありました。しかし近藤さんは義手を個性として表現できるよう、機能だけでなく装着するその人のニーズに応えられるデザインにしていることが話からわかりました。その考え方を聞き、福祉の面での義手もあれば、個性の面での義手もあると視野が広がりました。ただ、まだ自分の失った部分を隠したいと思っている人は多くいると思います。私も実際に腕を失ったら、できるだけ障害が分からないようにしたいとずっと思っていました。やはりそれは個人個人の捉え方であって、自分は人と違うということにある意味ポジティブに考えているか、ネガティブに考えているかということだと思います。その価値観の違いがあるのは当然であるはずですが、自分が何をしたいかでも捉え方は変わると思います。色んな意味で私たちの将来に関わるお話でした。

次に、班ごとのグループセッションを行いました。始めに菅原さんにお話を伺いました。菅原さんはハーバード大学出身でロシアビジネスに携わっている方でした。日本とヨーロッパの時計の用途の違いについての話を聞いたのが印象的でした。菅原さんは留学したり、海外に行ったりするメリットについて深く教えてくださいました。その中で重要であると感じたのが多様性を身につけることができることです。海外では自分が使っている物(携帯電話など)が使えないなんてことが多々あるようで、結構他国の物は日本の物と使う感覚が違うそうです。そこから多様性を肌で感じるができるということでした。また、留学は大学院生としてするのがいいことを聞きました。修士をとったら一人前なのでそれまでに留学し、多くの事を経験するべきであるからです。今の所、全然留学する予定はないですが、興味を持つ時が来ると思うので、その時に考えたいです。

2 人目にお話を伺ったのはアジア諸国の課題を研究している土居さんでした。土居さんは、アジアの高齢化が今後どうなるか政府に呼びかけたり、難民キャンプなどに対してプロジェクトを立ち上げたりしていて、経営・マーケティング学などを活かして経済や社会の利益についても研究されています。土居さんには海外で活動する仕事ならではの生きがいやこれから私たちがしておくべき事について質問を通して聞くことができました。まず、アジアで活動することでのやりがいは、世界中を回って色んな立場の人にふれあえることだそうです。近藤さんもおっしゃっていましたが、私も色んな人と関わることで自分の考え方もより深いものになると思います。また、これから私たちがしておくべき事は好きな事

に一生懸命取り組むことだそうです。スポーツでも学問でもやりきった後の自信は糧になるとおっしゃっていました。

最後にお話を伺ったのは基調講演をしてくれた近藤さんでした。基調講演で多くの事を話してもらったので、質問中心で答えてもらいました。私は、講演の中で気になった、一人一人、腕に障害を持った方は腕の長さが違うと思うがどのように対応して義手を造っているのか？という質問をしました。やはり腕の長さに対応していくのは課題であるそうで腕が短すぎると筋肉の信号を受け取れないそうです。また、個人のニーズに応じて開発しているので、個人の身体の課題にも真摯に向き合っているそうです。そして近藤さんにも、これからしておくべき事について伺い、留学をしておくべきだと答えてもらいました。留学する事で海外の人とコミュニケーションをとることになるので、必ず成功体験や失敗体験をしていくことになり、それらを積み重ねていくことが大切だということです。ディレクトフォース・笹川平和財団の3人の皆さんのお話を聞き、共通していたことは、経験を積み重ねて、多様な視点を持つべきであるということだと思いました。留学を勧めてくれたのは、それが根底にあるからだと思います。

今回のプログラムでは自分と年齢もそれぞれ職業も違う人たちの話を聞くことができました。直接、このような方々に質問する機会はもうあまりないと思います。ですがこの短い2時間で生きがいや将来へのアドバイスなど密の濃い話を聞くことができ良かったです。とても将来に向けて参考になる機会を設けてくれたディレクトフォース・笹川平和財団の皆さんに感謝しつつ、今後の進路や自分を見つめ直すことに学んだことを活かしていきたいと思います。

夏季プログラムが終わり、昼食をとり、午後1時を回った頃、私たちは順天堂大学医学部付属病院を訪ねました。私たちがお話を伺ったのは、今上天皇の冠動脈バイパス手術を執刀した天野篤教授でした。天野教授を訪ねたきっかけとなったのは、テレビや新聞など多数のメディアで教授を拝見したことでした。教授が天皇陛下を手術したことはもちろんのこと、「一途一心」のような大切にされている名言に感銘を受けて、私は訪問することを決めました。まず順天堂大学附属病院を訪ねさせてもらった時、岩手県盛岡市の高校生と一緒に話を聞きました。彼らは高校2年生で、研修の一環で臨床の場に立ち会い終わったところでした。彼らも医学部を志している学生ともあって教授に熱心に質問していて、1年後の私たちもあんな風になれたら良いと強く思いました。次に天野教授に実際に尋ねた質問についてです。1つは手術前に行っているルーティンのようなものはあるかという質問で、教授は手術前に見る鏡でスイッチを入れるそうです。その話題に関して盛岡の高校生が受験勉強で集中できない時にどうしたらよいか質問していて、教授は最終的には、何もせずに勉強に入るのがベストだとおっしゃっていました。「勉強の勝利者」になれるそうです。私も、切り替えやすいルーティンならば良いが、そこで、やる気を失ってしまうと意味がなくなるので勉強するときは、なんとか勉強にこじつけた切り替えの仕方を考えてみると勉強がはかどるな、などと考えたりしました。すぐ始めるのも良いことで、始めてしまう

とあとは勢いに任せて進めることができるとおもいます。また、私たちが色んな方々に聞いていた質問である、高校からやっておくべきことを、聞きました。それは体力をつけることだそうです。目的の為なら気持ちを強く持つ必要があり、精神的な落ち着きも鍛えるといいそうです。「健全な肉体に健全な魂が宿る」という言葉には深く感心しました。英語力を鍛えるのも良いそうで、英会話をしておく、不安や緊張がなくなっていくので、精神が鍛えられるそうです。

さて、私はハンドボール部に所属しているのですが、まだ初心者ということもあって、ボールを落とすことが多く、顧問の先生から、何回落とすんだー、と軽く注意されることがあり、基本的なことができない自分は、よく落ち込むことがあります。そんな時、天野教授はどのように立ち直っているかお聞きしました。教授は、落ち込む必要がないとおっしゃいました。落ち込むより、技術やメンタルを鍛え、同じミスを何度もしないようにしていけば良いそうです。データなどで自分を客観的に見ていくことも大事ともお聞きしました。具体的な改善策も教えてもらうことができ良かったです。天野教授とのお話を終えて、教授は医学の知識も豊富にもたれていらっしゃるようですが、他の学問やスポーツなどの知識も豊富で話していて、自分の見える世界が変わっていきました。私も、どんな職業につくかは分かりませんが、コミュニケーション能力や知識を磨いていきたいと思えます。

今回、ディレクトフォースの方々や天野篤教授のお話を聞き、自分の将来について見直す良い機会となつてとても密の濃い時間となり良かったです。これからも、尊敬する方々や、人生の先輩達にお話を伺う機会を自分から得て自らの糧にしていきたいです。